特活研究

No.94 －今こそ特別活動！－

2023.3　愛媛県教育研究協議会　特別活動委員会

第15回四国地区特別活動研究会愛媛大会、第53回愛媛県特別活動研究会に寄せて

四国地区特別活動研究大会愛媛大会
大会長　苅山俊樹

第15回四国地区特別活動研究会愛媛大会、並びに第53回愛媛県特別活動研究会が、愛媛県今治の地で開催できますことに心より感謝申し上げます。四国地区特別活動研究会は、「四国はひとつ」の合言葉のもと、平成９年の香川大会を第１回大会とし、２年ごとに四国４県をめぐり、特別活動の振興と会員相互の研修が図られてまいりました。今大会は「つながりを生かして学び、未来社会を切り拓く力を育む特別活動の創造」を大会主題とし、今治市立常盤小学校を会場に、学級活動、集会活動の公開が行われます。分科会では、授業研究と四国４県からの実践発表があります。文部科学省初等中等教育局　視学官　安部恭子　様からは「多様な人とつながり、未来社会を切り拓く力を育む特別活動」と題して講演と、安部様を含め、國學院大學人間開発学部　教授　杉田 洋 様、愛媛大学教育学部　教授　白松 賢 様による「未来社会をつなぐ特別活動」と題した鼎談も行われます。分科会では愛媛県教育委員会　指導主事　澤田様、森様、伊賀上様をはじめ、愛媛大学から城戸様、遠藤様、藤原様、梅田様、徳島県から榎本先生、高知県から北岡先生、香川県から川口先生に御助言をいただく機会にも恵まれました。お礼を申し上げるとともに、コロナ禍にあっても学びを止めない志のもと、特別活動の果たす役割や可能性について明らかにできる有意義な大会となることを確信しております。未来を担う子どもたちに、豊かな人生を切り拓き、よりよく生きていくことができるための資質・能力を育むことは大切なことです。急激に変化する時代、予測不能な時代と言われる中で、一人一人の児童・生徒が自分のよさや可能性を認識するとともにあらゆる他者を価値ある存在として尊重し、多様な人々と協働しながら様々な社会的変化を乗り越え、豊かな人生を切り拓き、持続可能な社会の創り手となることができるようにすることが求められています。

「放っておいて子どもが育った」これは教育にはなりません。特別活動は、「なすことによって学ぶ」を方法原理とし、場を作る、仕掛ける、集団活動を通して、よりよい学校づくり、よりよい学級づくり、よりよい自己実現につなげ、学校生活を、豊かに楽しくしていくものです。特別活動には、お互いに違いを認め合い共に生きる力、所属する集団や社会を他者と協力しよりよくする力、なりたい自分に向けて努力する力を育てるための実践が紐づけられています。新型コロナウイルスの感染が予断を許さない状況ではありますが、このような状況だからこそ、特別活動の実践が求められているようにも感じています。今こそ、特活！子どもたちの未来につながる特別活動を皆さんと共有し、一層の充実が図られることを願っております。

結びに、今大会の開催に当たりまして、常盤小学校の先生方をはじめ、各分科会での発表・司会・記録、研究会の準備・運営に携わっていただいている全ての先生方に、心より感謝申し上げ、開会のご挨拶といたします。

愛媛県特別活動の研究

Ⅰ　研究主題

つながりを生かして学び、未来社会を切り拓く力を育む特別活動の創造
―「人間関係形成」、「社会参画」、「自己実現」の視点を踏まえた『物語づくり』の実践を通して―

Ⅱ　研究主題のとらえ方

現在、ＧＩＧＡスクール構想や感染症対策により、学校での人と人とのつながりや学びに大きな変化が起きている。その中で、子どもたちの10年後、20年後の未来を見据えたとき、多様な価値観を認め合い人とつながる力や自分たちでよりよい新たな社会を築いていこうという意識、自己理解を深め自分の人生を切り開いていく力が必要である。特別活動は、これまで様々な集団活動を通して、児童生徒が、社会で生きる基盤となる力を育む活動として機能してきた。また、協働性や互いを認め合う土壌をつくり、生活集団、学習集団として機能するための基盤となってきた。特別活動における「なすことによって学ぶ」という実践的な活動は、子どもたちの集団への所属感、連帯感を育み、それが学級文化、学校文化への醸造へとつながり、各学校の特色ある教育活動の展開を可能としてきた。それゆえに、感染症対策で様々な制限がなされても、人と人がつながり、子どもたちにとって豊かな学校生活となるよう、「何ができるか」を子どもたちと共に考え、創意工夫することが今こそ求められる。

「人間関係形成」、「社会参画」、「自己実現」の三つの視点を踏まえて、児童生徒が様々な集団活動に自主的、実践的に取り組むことは、集団の中で個が成長し、その成長が結びつきながら集団の成長へとつながる。そこで「つながり」をキーワードに、人間関係や活動相互の研究を進める。多様な他者と協働する力やキャリア教育の中での自分らしい生き方を【人間関係のつながり】とし、児童生徒の教科横断的な学びや指導と評価の一体化のことを【活動相互のつながり】と捉える。特別活動において子どもたちの手による『物語づくり』を通して、「集団や社会の形成者としての見方・考え方」を働かせながら、未来社会を切り拓く力を育成できると考える。

Ⅲ　研究のねらい

1　「人間関係形成」、「社会参画」、「自己実現」の三つの視点を踏まえて、児童生徒が多様なつながりを生かして学ぶことのできるような授業実践と振り返りについて研究する。

2　「集団や社会の形成者としての見方・考え方」を働かせ、未来社会を切り拓く力を育む特別活動の在り方を、各教科や特別の教科道徳、総合的な学習の時間等との関連を図りながら研究する。

Ⅳ　研究の視点

【表記：（人）…人間関係形成　（社）…社会参画　（自）…自己実現】

1　よりよい人間関係を築く資質・能力の育成
～魅力ある学級の物語づくり～

一人一人が生かされる学級活動を展開し、それに伴い集団も成長する学級文化を育む。

（人）よりよい人間関係を形成し、よりよい生活を築く実践のための話合い活動の充実
（社）温かい学級集団の中で、自己の成長を目指す意思決定の在り方
（自）キャリア形成と自分らしい生き方に向けた一人一人の意思決定の在り方

2　よりよい学校生活へ参画する資質・能力の育成
～自発的、自治的な児童会・生徒会活動の物語づくり～

学級や学年を超えた児童生徒相互の連帯感を深める自発的、自治的な活動を効果的に展開する。

（人）児童生徒が互いのよさを認め合い、主体的に取り組む異年齢集団活動の充実

（社）児童生徒が課題解決に向けて、主体的・協働的によりよい合意形成を目指す実践の在り方

（自）よりよい学校や地域への自治的な活動による充実感をもたせる評価や振り返りの工夫

３　よりよいつながりを楽しむ資質・能力の育成

～協働し、認め合うクラブ活動の物語づくり（小学校）～

異年齢集団での活動を通して個性の伸長を図り、文化を実体験できる活動を工夫する。

（人）同好の興味・関心や思いやり・あこがれの気持ちでつながる異年齢集団活動の充実

（社）地域の特色を生かし、地域の人や文化とつながるクラブ活動の在り方

（自）異年齢集団で共通の興味・関心をより深く追求するクラブ活動の指導と評価の工夫

４　よりよい校風を確立しようとする資質・能力の育成

～集団への所属感、連帯感を深める学校行事の物語づくり～

創造的でダイナミックな体験ができる場や時間を保障し、所属感や連帯感を培う。

（人）多様な他者との交流や豊かな体験活動を通して、感動を味わうことのできる行事の充実

（社）児童生徒の主体的参加で、特色ある学校やよりよい校風づくりにつながる学校行事の工夫

（自）自他、集団の目標を肯定的に捉え、今後の活動によりよくつながる評価の工夫

Ⅴ　評　価

１　特別活動の目標を分析し、育成しようとする資質や能力と評価の関係を明確にし、評価の観点を各学校において独自に設定し、指導と評価に生かす。　【評価の観点】

２　各内容の目標を踏まえ、学校の実態や発達の段階等に即して、評価規準を明確にし、児童生徒一人一人のよさや成長を加点評価する。その際、集団の質の高まりについても評価し、その後の活動に生かす。　【個と集団の評価】

３　活動の過程を重視し、自己評価、相互評価、教師の観察、児童生徒の記録、１人１台端末等を活用し、継続的、多面的、多角的、総合的に児童生徒の変容を評価することで活動意欲につなげる。　【評価の方法】

Ⅵ　留意事項

○　全体計画と各活動・学校行事の年間指導計画の作成に当たっては、学校の創意工夫を生かし、学級、学校づくりを念頭に置きながら、学校の実態や児童生徒の発達の段階等を考慮して自発的、自治的な活動が助長されるようにする。また、各教科等の特性を踏まえ、適切な関連を図るとともに家庭や地域の人々との連携を工夫する。また、それらの計画は、必ず評価を伴うものとする。

○　特別活動と道徳教育は、子どもの心を育てる二つの大きな原動力であり、両者の関連付けを研究しながら、子どもの変容を評価につなげる。特別活動での学級や学校生活における集団活動や体験活動は、日常生活においての道徳的実践の場となる。特に、自己の生き方について考えを深め、集団のために働き、その一員としての責任や役割を担うなどの社会参画の力を育てるためには、特別の教科道徳の授業との関連が重要となり、両者の特質を十分理解し、道徳性の育成へとつなげる。

○　児童生徒一人一人が、社会的・職業的自立のために必要な能力を育成するため、自らの生き方を考えることができるよう、発達の段階等に応じ、小中連携を図った組織的・系統的なキャリア教育を推進する。その際、「キャリア・パスポート」を活用するなど工夫しながら、希望や目標をもって生きる意欲や態度を形成し、社会参画意識を醸成する活動等の研究を進める。

○　１人１台端末が整備され、特別活動の学習の一層の充実を図るための有用な道具としてＩＣＴを位置づけ、適切に活用することが求められている。以下のような様々な場面でのＩＣＴの効果的な利活用について実践を通して研究を進める。

〔学級活動〕　話合い活動の推進、振り返りの即時可視化など

〔児童会・生徒会活動、学校行事〕　オンライン集会、集団決定やアンケート実施など

〔クラブ活動〕　活動記録の収集・蓄積・共有、活動発表時の動画利用など

特　別　講　演

文部科学省初等中等教育局　視学官
安　部　恭　子 先生

多様な人とつながり、未来社会を切り拓く力を育む特別活動

愛媛県特別活動の研究について

「つながりを生かして学ぶ」という研究主題で実践を行っているが、コロナ禍で子どもたちの協働的な学びが制限されており、その中でも工夫を凝らして活動を行うことで、「未来社会を切り拓く力を育む」ことを目指して特別活動が行われている。二つの研究のねらい、「授業実践の振り返り」と「各教科等との関連」に沿って今回実践が行われていた。四つの研究の視点の中で、今回は中学校の実践で自発的に行う活動についての発表があった。一方で、小学校の現場では本来５・６年生が児童会活動を行うところを、６年生だけで行事の運営だけを行うといった取組も見られる。これでは、５年生が６年生になったときに自発的な活動を行うことができず、指示を聞いて動くだけになってしまうことが危惧される。学校行事を思い出としてだけでなく、学習の場とすることが自発的な活動につながるので、こうしたことが良かったというところから実践につなげていくと良い。

常盤小学校を見渡して

常盤小学校の校庭を見ると、大きなキリンの像が見守っており、花壇もきれいに手入れされている。中庭には種から育てた植物もきれいに咲いている。学校教育は、このような環境を通して学んでいくことができ、すてきな環境ですてきな子どもたちが育ち、地域に帰っていく。また、校舎内の掲示物は一方通行になりがちだが、相互通行の内容になっており、自分もやってみたいことを掲示物として書くことで、自分たちで学校生活をより良くしていることが伝わってくる。掲示を通して子どもが学ぶ、教師がきれいに整えるのではなく、ありのままから子どもたちは学んでいく。加えて、生徒指導の観点で見ることができるところもあり、雑巾がけを行う際、決まりだからと言ってきれいに並べさせるのではなく、なぜそうするのか、子どもたちが自分で考えて行うことができれば、それも自立するための活動につながっていく。

常盤小学校での実践（児童集会）

集会活動の中では、児童同士が互いに頑張りたいと思っている気持ちが伝わってきた。やらされているのではなく、楽しんでやっているので、このようなワークショップの活動を通して「こう思った」「こうしたい」と言える子どもたちが育っていく。それが、これからの学校生活を頑張っていこうという気持ちにつながり、「頑張って良かったな」と思える活動となり、自己有用感が高まっている。このような全ての児童が活躍できるワークショップを行うことで、いつも代表の子が同じになるということがなくなり、いろいろな子が活躍できる場となっていた。

常盤小学校での実践（公開授業）

１年生の授業は、「目ざせ！手洗いマスター」という題材で行われた。今回の授業では、事前にアンケートを取ることで、どのように意識を高めるかがよく考えられていた。また、ユニバーサルデザインの視点での授業が心掛けられており、言葉だけで伝えるのではなく、後から見ても分かるように黒板にキーワードを貼ったり、順番を電子黒板に映したりすることで、目で見て分かるように前に残しておくことも大切である。授業の中で大切なことは、最初に答えとして言ってしまうのではなく、子どもにギャップを体感させることで、気付かせることも大事である。先生が子どもたちに、自分の気付きが大事であるということを感じさせることでそれが周りに広がり、感染予防につながっていくというものであった。

５年生の授業では、ペア学年での活動を考えるというものであった。ペア学年での活動を行うと、リーダーになる子の数が多くなる。話合いで決まったことをレポートにまとめ、キーワードを示して活動を行う。キーワードになっているから、「これが大事」となってしまいがちだが、なぜそのキーワードになっているのか、その理由を考えることが大事である。その話合いの中で、２年生の思いや願いを事前にＩＣＴで整理してまとめておくことで、話合いをスムーズに行うことができていた。他の児童の意見を聞いて、「話す」ではなく「話し合う」になっていた。友達の意見を受け止めつつ自分の意見を伝えていくことができ、実際の場面を想起しながら意見を出し合えていた。この活動によって、２年生は「次は自分たちが頑張ろう」と思うことができ、５年生は来年に向けての成長につながっていく。

４年生の授業は、「夢とわたしと時々、勉強」という題材であった。学級の中での掲示物で、係活動や委員会活動の成果を示しており、学級のみんなの良いところや、マイナスの考えも出せるような学級経営ができている。やりたいことだけでなく、そこにある気持ちも考え、表現することで、夢の実現に向けて、こうしたら良いと児童が思える授業になっていた。例えば、自主学習は決められているからやるのではなく、自分のために行うということが理解できるように、一人一人に机間指導を行って声掛けを行いながら授業を進めていた。また、お家の人からの言葉も紹介することで、子どもたちの意欲につながった。現代の中で大切な自主決定の場をぜひ子どもたちに多く提供してほしい。

特　別　鼎　談

未来社会につながる特別活動

國學院大學人間開発学部
教　授　**杉田　　洋** 先生

文部科学省初等中等教育局
視学官　**安部　恭子** 先生

愛媛大学教育学部
教　授　**白松　　賢** 先生

安部　恭子先生より

新学習指導要領前文が全ての基盤となる。前文が設定されている意味を考えなければいけない。多様な他者というのは、同じクラスだけでなく、他クラス、異学年、地域、ＩＣＴ端末を活用して交流ができる離れた地域に住む人、外国にルーツをもつ人、支援の必要なお子さんなどである。様々な人と協働して生きていくためには、小学校段階から、多様な他者との協働を感じなければいけない。「学級活動はどうなの？」というと、質問調査で学級活動(1)について力強く「やっています」という子どもたちが３割ほどで、「やっていません」と答えている子どもたちが小学校で26.4%、中学校で23.6%もいる。では、先生方はどうなのかというと、子どもの調査よりも「やっている」と答える人が多く、「やっていません」と答えた人は６％しかいないというギャップ。(2)や(3)も同じ。先生方としてはやっているつもりでも、実は子どもはそう思っていないというギャップ。だからこそ、しっかり指導しなければいけない。ここにいる特活に興味関心のある、実践している、または学校で中心となっている先生以外の人たちに、いかに広めていくかが大切。人間関係形成・社会参画・自己実現の前に、築きたいなと思うような人間関係を子どもたち自身がもつことができないと、人間関係をよりよくしましょうと言ってもできるわけがない。社会参画意識は、「こんなクラスにしたい」、「こんな学級の仲間にしたい」、「こんな学校をつくりたい」というように、つくりたい集団や社会を考えていく。そうでなければ、具体的にどういう風にやっていくか分からない。自己実現は、自分らしく生きること。しかし、「自分らしく」というのは難しいため、小学校段階では、「なりたい自分」、「よりよい自分」や「前向きに頑張る力」というようにしている。特活は、集団活動というものを通して学ぶのだが、目標においても大事にしているように、評価においても、学習過程においても、人間関係形成・社会参画・自己実現を大事にしなければならない。それから、「なすことによって学ぶ」というのは、学習過程を大事にして、実践したことを振り返って、次に生かす。それによって、子どもたちがいろいろなことに気付き、自らよりよい生活をつくっていく。特活では、そういった非認知の力を大事にしているが、どうやって育てるのか。一人ではできない。集団活動を通して、関わり合いを通して、子どもたちができるようにしていく。今、子どもたちを取り巻く状況は、いじめ・不登校など様々。その中で、不登校は過去最高。タブレットがあれば通わなくても学べるというが、子どもにとって学びというのは、教科の学びだけではないことをしっかり考えなければならない。総則には、「生徒指導の充実を図る」と書いてある。そのためには、「自己の存在感を実感」させる必要がある。しかし、自己の存在感は一人では実感できない。集団の中で役を担って関わる中で、人間関係

をよりよく形成して、学校生活を充実させて、自己実現を図る。まさしく、特活が生徒指導の充実に資するといえるのではないか。

白松　賢先生より

ここから10～20年後の未来社会がどういう風に分析できるだろうかと考えると、今の日本というのは「沈みゆく太陽」だ。なりたい自分とつくりたい社会というのをどのように考えていくか。社会参画でありつつ、社会形成ができる、そんな子どもを育てていかなければならないと感じている。最近、学校へ行って、子どもたちを見させていただいているとき、いつも感じているのは、「この子どもたちが20～30年後の社会の形成者なのだ」ということだ。先生方が今、目の前にしている子どもたちに20～30年後、社会を託せると思って見ているか。これが特活の１番重要なポイントだと思っている。「私たちが、社会をつくる子どもたちを育てている」という、至極当たり前だが、その社会創造を意識して、今の子どもたちを見ているのかどうか。例えば先生の答えてほしいことを探って、回答しているような子どもたちや、言われたことは効率よくやるが、言われていないことは積極的にしない、そういった子たちがつくる社会というのは、おそらく「沈没」しているだろう。そうではなく、「先生、こんなことをやったらもっとよくなるんじゃないの？」とか「私はこう考えるんだけど」というような、意見が次々に出てきて対立が生まれる学級というのが、未来に対して希望がある学級だと思う。先ほど話した「沈みゆく太陽」は、「終わりの始まり」ではなくて、「始まりのための終わり」にしていけないかと思っている。私たちは今まで、学力をつければ社会が豊かになると思ってきた。先ほど話題に出ていた不登校の原因は、コロナだと言われているが、絶対に嘘だ。実は、傾きが変わるところが、コロナよりはるかに前だった。文部科学省が全国学テを始めて、上位の県の公表を始めてから不登校が増えた。愛媛県でいうと、県議会で10位以内を目指すと言った年が平成28年度だった。そこから愛媛県の小中学校の不登校は、全国並に右肩上がりに増えている。全国学テ10位以内と言っていない高校は不登校生徒数が減っている。学力向上ということで、何か間違えて学校の舵取りをしていないか。子どもたちが学校に通っていて、１番うれしいときや自分が解放できているときというのは、「昼休み」、「給食」、「休憩時間」だ。実は、学校を細やかに見ていくと、子どもが幸せになる場所というのは無数にある。しかし、それを学力に矮小化してしまったことによって、私たちは学校の舵取りを間違えたのではないかと思う。なんとなく将来にとってマイナスにはならないだろうという保険で学力を身に付けさせるのではなく、本物の意味での学力とは、様々な力が包含していて、非認知的能力なども含め、未来に投資する道というのを子どもたちにつくっていく。こういう学校になるために、特別活動が利用できないか。今後10～20年間見据えたときに、特活を使って社会のなり手をどうやって育てられるのかというのは大切なテーマである。

杉田　洋先生より

どこまでいっても我々は、社会と個の関係。そもそもいじめは、大人が見てないところで起こっているので、それを解決しようとしたら子ども自身がいい社会にしていかないといけない。そう考えると、今日は、常盤小の子どもたちがとっても幸せそうに私は見えた。誰一人活躍していない子はいなかったからだ。それが１番だと思う。やっぱり、子どもの笑顔を作れるのが特活なのだ。それができなくなったら、特活の役割は終わってしまう。とりわけ、あまり勉強だけでは活躍できない子への力っていうのはすごく大きい。今、小さな学級や学校という社会をよりよくしようとする活動を通して、やがて出ていく社会で一国民として活躍していくというつながりになっている。今できないと大人になってもできない。そういう意味では、将来に生きて働く資質・能力をちゃんと育てられるのかということが重要だ。今日のテーマは未来。毎日、「来てよかった」と子どもが思えるというのが、学校の価値だと思う。全て

の子どもと保護者の笑顔を作り続けること、幸せな学校生活に特活が貢献し続けられるのであれば、特活は教育課程上に役割を果たし続けていく。その時々の社会生活で生きて働く資質・能力を確実に育成できるのであれば、特活は役割を果たし続けるのではないか。日本の学校の特徴は、勉強ができなくても他の場所で挑戦できる場所があるってことだと思う。そこで活躍ことができれば、勉強できる子を越えてもっと幸せになるし、もっと社会に役立つ人間になるかもしれない。

コンピテンシー育成をベースとしての教育課程改革が世界の潮流で、それは特活にとって追い風だったと思う。とりわけ、人間形成とか人格形成と言って古くて新しい課題、教科で身に付けた力を社会で働く力にできるんだっていうのは、特活が始まった時点での期待がもともとそれだった。やっと特活の出番が来たぞ、と思う。問題は、キャリア教育みたいな言い方をされるとまるで新しい力に見えるが、人間関係形成・社会参画・自己実現は、国が示した基礎的汎用的能力を実際に組み合わせて使う力で、それを意識してやり続けられるかということ。問題は、本当にこれを育てられるかってことだと思う。かつては、学級会が上手にできたとか子供が活発だったとかの議論をしてきた。最近では、本当にこの学級会で子どもが育つ学級会だったという議論になってきた。特活は、膨大な崇高な期待が掛けられている割に、やっていることが楽しいレベルで終わってないかと言われてしまう。そして、資質・能力が教科と違って因果関係が分かりにくい。そこは明らかにしていくしかない。やり続けていくことができるかということが大事だ。

これからの未来社会を切り拓いていく子どもたちに学校という場所でどのように「社会参画」していく意識を育てていくのか

安部　恭子先生より

「社会参画」をするためには、まず、学級・学校に対して愛着がないといけない。学校に居場所を感じられなくては課題に気付かない。居場所を感じられなくて、参画意識が高まるのか。高まることはない。「どこにも居場所がない」と答えている若者が、コロナ禍でどんどん増えている。居場所を作るというのは、先生が「あなたの居場所はここだよ。」というのは一つの方法かもしれないけれど、学校というのは友達と関わり合って生きていく場所であり、集団の中で役割を担って果たせるような場や機会の充実を図ることこそが、子どもたちの参画意識を高めるだろう。参画というのは、参加ではない。企画・運営も自分たちでやっていく。それは学級活動だけではなく、児童会活動、生徒会活動、クラブ活動などの自発的・自治的活動だけでなく、学校行事も当てはまる。子どもたち自身がやりがいを感じられるような集団活動をどう組んでいくかが大切だと考える。

白松　賢先生より

子どもが居場所を感じられる場所が、学校であってほしいと思っている。だから、特別活動を着目してきた。どうやって「居場所」だと感じるのだろうと考えたときに、「楽しい」＝「居場所」ではないと感じる。光があるということは、その光の分だけ影がくっきりとあるということを考えなければならないのが、社会の難しさだ。「元気な挨拶」「笑顔で挨拶」と先生が言っていたが、自宅で苦しい思いをしている子どもが学校で「笑顔」や「元気」でいることを強要されてしまうと苦しくならないか。特活の難しさというのは、「良いもの」はひっくり返すと「課題」にもなってしまうということだ。そこが、先生方が実践していく中で躊躇してしまうところだと思う。誰かが心の居場所になってくれるとよいなと感じる。特別活動を行った後に生まれてくる居場所感というのは、ほっとして何か会話できるような瞬間がたくさん生まれてくることがとても重要ではないかと思う。楽しいのは「動」の心の動き、「静」の情感としての繋がりが生まれることが大切なのではないか。それは瞬間的なものでよいのだと思う。少しの情感の共有でいいので一部の仲のよい人とだけでなく、多様な人との間に生まれていくような関係

につなげていける特活になるとよい。先生がいない場面で、こういった瞬間が次々と生まれてくる学校が難しいことだが理想だ。遠藤周作さんが本当に人生で楽しいときというのは、「苦楽（くるたの）しいとき」なのだと書かれていた。何かを乗り越えることができたときには、自分の成長実感するなど前向きになれやすくなる。特活を進めてきたことで、話合いの上手な子どもたちが育ってきた。その中で社会学者として気になっていることは、民主社会というのは葛藤と対立がたくさんある社会ことだ。話合いの中で、異論や反論が出て、話合いが停滞してしまうというのは、民主主義としてとてもよい状態だから、それを恐れない特活をつくっていってほしい。賛成・反対は意見を比べ合っているのではなくて、ただ自分の好みを言っていることに過ぎない。むしろ、「これは話し合う価値あるの？」などと本質的に困る発言をする子というのはとても大事だ。反論されるということは、それだけの価値のあることをしているのだということである。そういった意味では、「折り合えない」ということもあるということを学習する必要がある。その時に、「いろんなことを言ったけれど、自分の意見を大切に議論してくれる」という学級になっていくということを、高いレベルだけれど求めていく必要もあるのではないかと思う。

杉田　洋先生より

今までに出た３つのキーワードは、「楽しさ」「居場所」「社会参画」は、ばらばらのものではない。学校の楽しさは、「できないことができるようになる」「人に与える、与えられる」とかだと思う。できなかったことが級友の励ましの中でできたら最高の喜びだと思う。そういう場を作らないといけない。日本の若者は社会参画意識が低いと言われているが、本当にそうだろうか。震災のときに、地元の中学生はボランティア活動を自分たちで考えて進んでやった。あれほどのことをやった。そう考えると、大人は若者に、社会に必要だという役割感を与えてきただろうかと思う。実は、日本の若者は社会参画意識を元々持っているのではないか。任せも期待もしないのに、責任感だけ養うなんてできない。なぜ、指示待ちの子どもが多いと言われ続けているのか。そうしているのは誰か。特活というカリキュラムがもつ力というよりも、効果的に運用・展開できる教員がいてこそ生きるのではないかと思う。特活を生かす教員が少なくなっていることに危機感がある。社会参画の意識については、誰かのために自分で判断して行動し、「ありがとう」と言われない限り、喜びを感じることはできない。そのようなことをさせていないのではないか。教員は教える存在でないのに相変わらず教えこんでいる。「為すことによって学ぶ」という特活は難しい。為すことは誰でもやっている。しかし、為すことを通して学んだという意識が子どもにあるだろうか。体験と成果は繋がっていないのではないか。それが因果関係が見出しにくい原因にもなっている。

これからの子どもたちの能力を育てる教員の特活力を上げるために大事なこと

杉田　洋先生より

特活をやれば学力も上がるとはっきりと分かった。問題はこれが因果関係ではないことだ。逆も言えるのだ。特活を一生懸命やっていると生徒指導上の問題を解決できる教員もいれば、できない教員もいる。だからカリキュラムの力とは言えない部分がある。普段の授業はどうだ、子どもとの関わり方はどうだというところまで関わってきて、特活と教員の資質能力を数値化することをやっていかないといけないかもしれない。難しい。しかし、うまくいっている人とそうでない人の行っていることの傾向は明らかにある。そこをヒントにしたい。

安部　恭子先生より

子どもと先生、子どもたち同士の人間関係が良いと学び合う力が高まっていく。だから、特活は学級経営の充実と資するものがある。しかしそれは、その先生が元々持っているものではない。校内研修が

重要なのだと思う。初任者研修でも、特活の研修はない。常盤小のように学校全体でいかに取り組めるかが大切である。それには、管理職や行政の理解があることも大切だ。これが特活を阻んでいる一番の原因だと思う。だから、国でも参考になる資料を作成している。もっと「特活で子どもが変わった」ということを広めてほしい。校内研修などで子どもの姿で語って、実践を通して教師が高まっていくことが必要だ。

白松　賢先生より

学級活動の(1)、(2)、(3)で扱うものは、私たちもどうしていいか分からないものである。生活習慣はいい方がいいに決まっているけれど、大人だってできない。同じ課題を先生も子どもも抱えている。特別活動の魅力の一つは、先生と子どもをフラットな関係で話し合える場所だということ。話し合ったことをとりあえずやってみよう、だめだったらもう一度、角度を変えてやってみようと１年間やっていくのだと思う。学級をきちんとまとめないといけないというプレッシャーが先生に大き過ぎる。うまくいかないと先生個人が責められる構図が、先生を苦しませている。誰かのクラスで何かあったときに、教員全体として私たちにも、何か責任があるのではないかという考えが、公平な学校なのだと思う。社会で何か問題が起こったら、誰かにではなく社会全員に問題があると社会学では考える。うまくいかない学級があるとすれば、学校全体で改善していくためにみんなで話し合う場、子どもの声を聞く場を持とうというところから特別活動をしていけばいいのではないか。あるとすれば、子どもの声を丁寧に聞く力と一人一人の子どもがどういう思いでこの椅子に座っているのだろうかと思いを寄せる力というのが、特別活動の出発点と出口にあると思う。子どもの声を聞く力というのが、安心して学校に通える学級・学校になっている気がしている。

安部　恭子先生より

同じことが教員という組織の中でも言える。日頃から悩みを相談できる、情報交換できるという、先生の人間関係がコロナ禍でうまくいかなくなったり、働き方改革ということで効率的なことや時短のことばかりに目が行ったりしていることが、特活にとっても大きな課題になっているかもしれない。先生同士の関係性を作らないと、子どもが生き生き学び、自分の良さを発揮できるような集団にはならないと思う。

杉田　洋先生より

OECDが社会情動スキルを言っている。知識技能をどう使うかは人間である。それを使って人を不幸にもできる。だから、日本は使える能力そのものと使える人間の両方を育てようとしてきた。特活が弱ったのは働き方改革だった。余裕がないとできない。また、日本の学級担任制度が大きい。一人の人間が一定の人数を束ねないと国民に教育できないことにしてしまった。自分がいないときにもちゃんとしないといけない。だから、従順な子にしておかないといけない。子ども同士が管理し合う方が便利だ。特活にはマイナスだ。こういう中で、どういう教員が必要か。次回、四国大会の高知県は行政を上げて特活をしている。うまくいっているかいってないかを見るバロメーターの中に、特活のやり方が分かったかというのは、あまり影響していない。児童・生徒理解のあり方が変わったか、子どもとの関わり方が変わりましたかなどを聞いている。そこで「はい」と答えた人が効果を挙げている。つまり特活だけではない。特活をやることで子ども観や教員観、指導観が変わってきている。真面目で従順で、先生がいなくても大丈夫な集団を作るために特活を使うことが問題で、合意形成は忖度しろ、空気を読めとなってしまう。そうなってしまうのがいけない。

特活の視点からの学校へ通う意義や意味

白松　賢先生より

誰かと関わって何かすると、一人でするよりも様々なことができるし、自分とは違う価値観に出会って自分の考え方を変えたり見方を広げたりできる。そういう場所になることが、特別活動を通じて子どもたちが学校に通う意味なのかと思う。もう一つは、誰かとほっとした状態で、情感を共有する瞬間的なものの蓄積が、他者への信頼感や繋がりを作っていくのではないかと思う。また、苦しさも感じるというのも特別活動であり、そのアプローチをしっかり考えておくことも、子どもを受け入れる側として大切なことである。

安部　恭子先生より

居場所が多いほど自己肯定感が高く、チャレンジ精神も高い、充実感も高いし、将来への展望も高い。特活は多様な集団活動を通して子どもたちが学んでいく。しかし、その多様というのは異年齢交流だけでなく、同じ学級の中でも係活動のグループ、生活グループなど様々あり、そこから居場所作りは始まっていくだろう。そして、実践や体験活動を通して学ぶだけでなく、次への意欲につながっていくことができる場や機会の充実を図れるのは特活だと思う。ただ実践する、活動するだけにしないでほしい。子ども自身の「みんなでやってよかった。」と実感が伴うような実践をしてほしい。特活は納得解を決めていくので、他者の思いを受け止められるような子どもを育てたい。そのために、誰かに受け止められたという経験ができる生活を作ってほしい。

杉田　洋先生より

特活の強みは３つある。主体性と協働性と創造性。つまり、子どもが主体。教員が主体と思っている人にはできない。協働性も、子どもによる協働性であって「縛り」ではない。創造性は、子ども自身の工夫だ。３つというのは、アクティブラーニングが必要。よい社会もこれが必要。つまり、特活の強みの３つを、どのように大事にし続けるかに、教員の指導観が出てくる。だから、特活が大事だと言う教員はいい教員だと思う。なりたい自分もなりたい社会も子どもが考える。追求した結果、子どもが育っていないといけない。しかし、特活は因果関係がはっきりしない。だから、特活の良さを伝えにくい。教員の関わりをはっきりさせることが必要だ。「為すことによって学ぶ」を子ども流に置き換えて、キャリア・パスポートの前に特活パスポートを作ったらいいと思う。特活で学んだことを可視化していくことが大事だ。

分科会Ⅱ　小学校　学級活動(1)

つなげる！つながる！ 子どもたちと共に創る特別活動

～系統的な話合い活動の指導実践と学級活動(1)の指導を通して～

今治市立常盤小学校
教諭　白石　万悠子

提案要旨

1　はじめに

本校では、「つながりを生かして学び合い、よりよい学校生活を主体的に創造する児童の育成」を研究主題に、学級活動(1)の授業研究・実践に努めている。

学級活動(1)の指導の充実と、そこでの学びを途切れさせることなく次学年につなげていくために必要なことは何か、学級活動(1)を支える話合い活動に系統的な指導・実践研究を通して明らかにしたいと考え、話合い活動におけるロードマップの作成や話合い活動の充実を図った。

2　実践事例

(1)　“つなげる”―合意形成を促す系統的な話合い活動の指導の在り方―

ア　６年後にはこうなる！常盤小話合い活動ロードマップ

「合意形成を図る話合いの基本を身に付ける」「提案理由に沿って合意形成を図る話合いを展開する」という目標の達成に向けて、目指す児童像を学年ごとに示し、評価基準に沿って授業を展開した。

イ　高学年につなげる低・中学年の話合い活動授業実践

第２学年では、「折り合いモデル」をキーワードの１つに掲げて授業を展開した。例えば、合意形成のキーワードになるものに〇を付けて提案理由を明示した。また、自分と友達の意見を比べ、合意形成を図る過程で、合体型・順番型・条件型のいずれかを使い、折り合いをつけるための工夫を行った。

第３学年では、児童の提案理由の中から大切にしてほしい言葉に色分けした印を入れて提示し、児童が提案理由に沿った話合いができるように工夫した。色付けした印は、提案理由に立ち返って考えるための「キーワードマーク」として活用することで、児童の合意形成を視覚的に促し、意見をまとめていくための手立てとした。

(2)　“つながる”―学級活動(1)物語掲示に見る児童の姿―

児童の活動の様子や振り返りに、コメントやキーワードを記入したものを、児童がいつでも、どこでも、何度でも振り返ることができるよう工夫して掲示した。物語掲示の基本レイアウトを決めることでシステム化し、効率的に行えるように工夫した。

(3)　“つなげる”―話合いの素地を豊かに養う、つながりを意識した低学年の学びのデザイン―

幼児教育との関連を意識し、各教科等での学びを実践につなげた。生活科では、「おまつり」を学習の対象に設定し、友達と「常盤のまつり」について話し合った。常盤小話合い活動ロードマップに沿って話合いを進めることで、話合いの素地を養うことに努めた。また、ときわっ子会議ノートを使うことで、児童が自身の成長を振り返る記録として活用できるよう工夫した。

3　成果と課題

〇　学校全体で見通しを持った指導体制を確立し、児童の学びを支え促し発展させることにつながった。

〇　児童が授業を通して学んだことを次に生かすことができるようになった。また、個人の成長が、集団としての質を高めることにもつながった。

〇　児童の自己肯定感、自己有用感、学校満足度を向上させることができた。

〇　活動に対する教師間の意識の差が、学級間格差につながらないよう気を付けなければならない。児童にとっても教師にとっても負担感が少なく、楽しめるものにしていく必要がある。

〇　話合い活動の授業研究を中心に、更なる集団作りの研修が必要である。

研究協議・指導助言

〇　話合い活動におけるロードマップの作成がすばらしい。自校でもぜひ使ってみたい。

〇　学校全体での取組がすばらしい。学校独自のノートを有効に活用することで、児童間での相互評価を児童自身が知ることができるのが良い。

〇　ロードマップの作成において、児童が５・６年生になったときにどうあるべきかという姿から逆算したところがすばらしい。学年に応じた指導と支援のバランスが大事だと改めて感じた。

〇　６年間の見通しが立っているのが良い。ロードマップを活用することで児童が立ち戻る場所がある。

分科会Ⅱ　小学校　学級活動(1)

コロナ下であっても楽しめる、１年生とのペア活動を企画しよう

～Sky Menuのポジショニング機能を用いた合意形成の在り方について～

香川県高松市立屋島東小学校
教諭　藤本　彩織

提案要旨

１　はじめに

本学級のクラス会議では、多くの児童が積極的に意見を出し、協力して話合い活動ができるようになってきたが、中には自分の意見をもっていても自信がなくて発表できなかったり、一方的に自分の考えだけを述べたりする児童もいて、児童全員の意見を話合いに反映させにくい現状があった。そこで、自信のない児童にも意見を表示しやすくなるとともに、児童同士の意見をつないで発言しやすくなる手立てとして、Sky Menuのポジショニング機能を使うことで児童の意見の変容を見える化していこうと考えた。

そして、本校で行っている６年生と１年生がペア学年となって校外学習や行事等を年間通して交流している学習が、感染症対策のため１学期できなかったために、２学期はぜひやりたいという声が上がったことで、コロナ下であってもお互いのことをより知ることのできる遊びを企画しようということになった。

２　実践事例

(1)　ハンドクラップ

コロナ下ということで、一斉に声を出すことが制限されているので児童と話し合い、クラスで取り組んでいたカップスのリズムで、ハンドクラップをすることで、一つの課題に向かって話し合う気持ちに切り替えることができた。

(2)　ポジショニング機能を用いた、座標軸を活用しての合意形成

より多くの児童の意見を集め、話合いを深める手立てとして、Sky Menuのポジショニング機能を使用した。なかなか話合い活動に参加できない児童も、自分の考えを話合いに反映することができた。座標軸に短冊を配置することで、意見のよさをより明確にし、比較や決定の基準を明らかにすることができるようにした。短冊の位置によって学級としてのより良い意見を見つけることができた。

(3)　代替え案を述べる力、友達の意見とつないで発表する力

前時の話合いの内容を受けて、計画委員会で司会団が話し合う内容を共有し、決まったことからつないで意見を発表しやすくするようにした。

(4)　振り返り

話合いの後、各自が「ともだちノート」に振り返りを書く時間を設けた。自分や友達の伸びを実感し、次時の話合いに生かしていく効果があった。

３　成果と課題

(1)　成果

○　Sky Menuのポジショニング機能を用いたことで、少数派の児童や発表の苦手な児童の意見をみんなが伝えることができた。

○　少数派の児童の意見を知ることで、反対派の意見をより多く拾い集めることができ、それをもとに次の話合いの視点が得られた。

○　１年担任のメッセージを伝えることで、相手意識をもって意見を述べることができた。

○　ペア学習は、自分たちで遊びやルールを企画したことにより、多くの人たちの役に立てたという成就感を味わうことができた。

(2)　課題

○　司会団が意見をつないでいけるように声の掛け方を工夫しようと考えていたが、話合いの中で活用することが難しかった。

○　友達の意見を聞いて考えを変えた児童は、マーカーを動かしたが、その理由まで聞くことができなかった。その理由をもっと聞いていれば、より話合いが深まった。

研究協議・指導助言

○　ポジショニング機能は学活だけでなく道徳や他の教科にも活用することができるので、場面を考えて活用の方法を工夫したい。また、座標軸の扱いを工夫すれば低学年にも応用ができるので、児童の発達段階を考えながら多様な使い方を工夫したい。

○　ポジショニング機能は話合いの可視化である。少数意見や反対意見を引き出し、話合いを深める手段として工夫して活用することで、児童の話合いや折り合いをつける能力を伸ばしていきたい。

分科会Ⅱ　小学校　学級活動(2)(3)

「はっけん！より豊かに拡がる『自分らしさ』

～系統的にキャリア形成と自己実現を図っていく学級活動(3)の検討～

愛媛大学教育学部附属小学校
教諭　河野　幹大

提案要旨

1　はじめに

愛媛県の学級活動の現状は、課題設定から振り返りまでの一連の活動を「実践」として捉えた授業や、学年間のつながり等の系統性を意識した授業が少ない。そこで、発達段階と系統性に配慮しながらPDCAサイクルを基盤とした学級活動を積み重ねることで、児童のキャリア形成及び自己実現を図ることに有効かどうかを検証するため、本主題を設定した。

2　実践事例

(1)　学級活動の系統性の確認

学習指導要領解説の学級活動で示されている指導の目安を、低学年から高学年にかけて、なだらかに割合を変えながら指導することで、系統性をもたせることができるとともに、児童の実態に即してより効果的に資質能力を育成することができると考えた。

(2)　PDCAサイクルを基盤とした学級活動の充実

ア　係活動の見直し（Plan）

３学期に入って、係活動が停滞していた。そのため、今までの活動を踏まえて、係の目標と個人目標の作り直しをした。これにより、活動への意識を高められた。

イ　係活動の見直し（Do）

新たな目標を意識し、児童は係活動にこつこつと取り組んだ。

ウ　係活動の見直し（Check）

ロイロノートを活用して、自分自身の活動、同じ係の児童の頑張り、他の係の児童の頑張りの３点を『係愛カード』に記入させ、毎週末に活動を振り返らせた。一週間の活動を意識的に振り返ることで、継続的に活動に取り組めるようになった。また、友達の動きに着目させることで、友達の頑張りから学ぶ姿や、みんなで支え合おうとする支持的風土が感じられるようになった。

エ　係活動の見直し（Act）

『係愛カード』に成果と課題を詳しく書かせるようにした。さらに、具体的に改善案を書かせ、次に生かせるようにした。頑張りが明確化してやる気が高まり、改善していく過程で、より良い係活動や学級づくりにつなげられた。

(3)　学級活動(3)の授業実践

係活動での学びが、キャリア形成及び自己実現にどう結び付いたかという視点で、学級活動(3)の授業開発をした。

「つかむ」で、これまでを振り返り、係活動で感じた思いの全てが、人のために行動したり働いたりすることだと価値付けた。次に、「さぐる」で、自分たちの伸びや良さを実感させた。「見付ける」では、児童が、もっと成長したいという願いを持ったため、５年雪組でスタートダッシュを切るために、何をしていくかについて、よりよい成長を目指した話合いを行った。「決める」では、個人目標を定め、春休み中に実践することとした。

この授業実践を通して、児童は係活動の中で成長を実感し、人のために行動することの良さや意義を実感することができた。また、キャリア形成における基礎的・汎用的な能力の育成にもつながった。

3　成果と課題

○　自己有用感や達成感を味わい、活動への意欲を高めることができた。人間関係形成能力への育成にも効果があった。

○　PDCAサイクルの蓄積、それを生かした授業実践により、自身の成長を実感し、自己の良さや可能性を理解することができた。

○　学期末の授業実践であったため、振り返りを十分にできなかった。

○　自己理解を深めることができる内容を明確化し、どの発達段階でどのような授業をするかを検討していく必要がある。

研究協議・指導助言

○　係活動は自由度が高いため、学級担任によって取組が大きく変わる。学年間の系統性を重視した取組についても今後研究を進めていきたい。

○　係の人数が少ない方が自己有用感を高めることにつながるが、児童の実態に応じて、適切な人数で運営していくとよい。

分科会Ⅱ　小学校　学級活動(2)(3)

自主的、実践的な集団活動を通して、互いのよさを生かし、よりよい生活や人間関係を築こうとする態度を育てる特別活動

～多様な関わりを通して、共に生きる喜びを実感し、笑顔輝く児童の育成～

徳島県上板町立神宅小学校
教諭　飯田　智恵子

提案要旨

1　はじめに

本校は、学級数８、全校児童119名の小規模校である。「心身ともに健康で、よりよく、たくましく生きる児童の育成」を教育目標に掲げ、日々の教育活動に取り組んでいる。学校全体の取組の視点として、①認め合う集団づくり、②言語活動の充実、③教員の適切な関わりの工夫とした。そこで、本校の児童の実態を踏まえ、互いに認め合う心と自主的、実践的な態度を育てる特別活動の研究を進めたいと考え、本実践を行った。

2　実践事例

(1)　学級活動(2)「現在の自分を見つめ、自己の成長を考える学級活動」

ア　健康教育参観日

学校保健目標を「基本的な生活習慣の確立と体力の向上」と定め、特別活動で育てる資質・能力「人間関係形成」「社会参画」「自己実現」と合わせて実践した。養護教諭や栄養教諭など、担任以外の専門性を生かした指導者との連携も図った。

イ　各学年の学級活動(2)第１学年「すごいぞあさごはんぱわあ」

朝食についての紙芝居を視聴し、内容について話し合うことを通して、進んで朝ごはんを食べようとする意欲を高めた。栄養教諭との連携を行い、実践カードを使い、習慣化を図る実践を行うとともに家庭への啓発を行った。

ウ　第３学年「学校生活のきけんをなくそう」

特別活動ノートを用いて、安全な生活を送る意欲や態度を育てるために、１週間の自分の生活を振り返らせた。

(2)　学級活動(3)「将来を見通し、なりたい自分に向けて努力する学級活動」

ア　各学年の学級活動(2)第６学年「自分の役割について考えよう」

「先生方から６年生へのメッセージ」を視聴し、自分たちの頑張りや改善点に気付くことで、自分の目指す姿の具体的な取組について考えを深めた。

イ　第６学年「自主学習をレベルアップさせよう」

１人１台端末を活用し、自分の考えを提示し、具体的な目標を考えた。

3　成果と課題

○　個々の実践に関心を持ち、励まし合ったり頑張りを認め合ったりすることができた。

○　振り返りを積み重ね、自己の変容を意識しながら取組を進める中で、自尊感情の育成を図ることにつながった。

○　１人１台端末の効果的な活用について更なる研究を進めていく必要がある。

○　学級活動(2)(3)の違いを明確にし、年間活動計画を見直すとともに、発達段階に応じた授業実践を行うことが課題である。

研究協議・指導助言

○　学校全体で目標や意義を共有し、全教職員で特別活動に取り組む協働体制が大切である。

○　１人１台端末は、発表や書くことが苦手な児童にとって有効な手段になるので、効果的な思考ツールを検討していくと良い。

分科会Ⅱ
小学校　児童会・クラブ・学校行事

身近な伝統文化の価値に気付く体験活動の充実

―ふるさとを愛する心の醸成を目指して―

北宇和郡鬼北町立泉小学校
教諭　松本　治土

提案要旨

1　はじめに

本校は昭和49年設立当初、208名の児童数であったが、以後徐々に減少し、現在は38名となっている。校区である泉地区は高齢化が進んでいるが、様々な伝統文化を保存継承している地域である。このことを踏まえて、学校と地域が密に連携し合い、地域に残る伝統文化に親しむことを通して、自分の住む地域を愛する心情を育むことができると考え、本主題を設定した。

2　実践事例

(1)　鬼北文楽クラブ

鬼北文楽クラブでは「傾城阿波鳴門巡礼歌の段」の人形遣いや語りの体験を通して、伝統文化について学ぶ活動を行っている。コロナ禍以前は、練習の成果を毎年11月中旬に本校にて行われる「学芸会・遺跡祭り」で舞台披露をしていた。学芸会と同日同会場にて開催される遺跡祭りは泉地区の方々が多く参加される催しである。学芸会・遺跡祭りの場で「傾城阿波鳴門巡礼歌の段」を披露することは、児童にとって誉の場であり、地域にとっても伝統芸能を楽しみながら伝統文化が保存継承されていることを再認識できる場ともなっている。

(2)　茶道クラブ

茶道クラブでは、お点前やお運びなど茶道の作法を通して伝統文化に慣れ親しんでいる。ただお茶を点てるだけでなく、お運びにおける作法やふくさのたたみ方などについて地域の方々の力を借り指導を受けている。お茶を点てる際、添え菓子の差し出し方、いただき方についても指導を受け、洗練された日本文化の良さを感じとる機会となっている。鬼北文楽クラブ同様に「学芸会・遺跡祭り」では、校舎内和室を茶室に装飾し、地域の方々に向けてお茶会を開催している。

(3)　まとめ

ここ数年はコロナ禍にあることから満足な活動ができていないのが実態である。しかし、地域の方はできる範囲の中で泉小学校児童に関わり続けてくださっている。この気持ちに児童たちも応えようと、真剣に活動を行っている。長年にわたって泉小学校に関わってくださる方がいることは、ふるさとを愛する心情の醸成につながっている。

3　成果と課題

○　地域の力を借りながらクラブ活動を推進していくことは、泉小学校・泉地区の「弱点」を補完する形を取ることからとても有意義な活動になっている。今後も連携を密にしていきたい。

○　コロナ禍にあって、活動の場が制限されてもクラブ活動を通しての伝統文化教育推進が途絶えないのは、20年以上にわたる泉小学校と泉地区との連携力の強さであることが実感できた。

○　クラブ活動を行う上で、もっとも大きな課題は、児童数減少によるクラブ員の確保である。20年以上に渡る連携をこれからも生かしていくために、今後は伝統芸能の練習の場を総合的な学習の時間に行う探究活動の一部に取り組むことも視野に入れている。児童数の減少は止められない。しかし、地域の方の力を借りてでも、地域の文化に触れる機会を絶やさないように、クラブ活動を存続する方法を模索していきたい。

研究協議・指導助言

○　クラブ活動を存続していくために、クラブ活動の時間から総合的な学習の時間に行う探究活動の一部に取り組むことも視野に入れていくことで教科横断的につながっていき、良いと感じた。

○　クラブ活動だけではなく、総合的な学習の時間や生活科などでもコミュニティ・スクールを活用していて、改めて地域の力の重要性を知ることができた。

○　教育活動全体を通して、学校を拠点とした地域づくりが大切になっていくことが分かった。

分科会Ⅱ
小学校　児童会・クラブ・学校行事

だれもが生き生きと活躍できる集団の育成

～児童に委ねる活動を通して～

高知県安芸市立土居小学校
教諭　丸子　清志

提案要旨

１　はじめに

前任校の川北小学校では、令和元年度から３年間「夢・志を育む学級運営のための実践研究事業」の指定を受け、特別活動を中心とした研究を進めてきた。その結果、児童の主体性を育むことができた。一方、学校生活に対する満足度では二極化が見られるなど、２年間の取組における課題も明らかになった。その要因としては、学級や学年、委員会によって活動の内容や充実度が異なったり、すべての児童が活躍できるような活動が実施できなかったりしたことなどが考えられる。そこで、前年以上に特別活動の充実を図るとともに、すべての児童が活躍できるような実践を重ねていきたいと考え、本主題を設定した。

２　実践事例

(1)　委員会・異年齢交流の活性化

ア　児童を中心とした枠組みづくり

児童会活動では、児童主体の活動になるような枠組み作りに取り組んだ。児童たちの心の交流や思いやりの心の醸成を目指して、児童が企画した集会や異学年が交流する活動を実施した。

イ　校内掲示物の充実

児童の活動に対して、掲示物を利用した肯定的な価値付けを行い、児童のやる気や達成感につなげている。

(ｱ)　ありがとうメッセージ

委員会が企画した活動や行事の後には、必ず児童全員が、ありがとうメッセージを付箋に書き、感想や感謝の言葉を掲示物にしている。

(ｲ)　５つの“や”掲示物

「やりたい」、「どうやる」、「やってみよう」、「やってみたら○○だった」、「次はこうやりたい」という５つの“や”を用いた掲示物を作ることで、子どもたちが取り組んだ活動の足跡を大切にしている。

(2)　学校行事の充実について

ア　児童主体での運動会

代表委員会で運動会のスローガンを決定した後、各学年の代表児童から運動会を盛り上げるための工夫について意見が出された。それらの意見を基に、学年の枠を超えた３つのチームが立ち上がった。それぞれのチームが自分たちで考えた活動を各学年の児童と協力して行うことで、運動会を盛り上げた。

イ　教職員の意図的・計画的な準備

子どもたちの「やりたい」を実現するために、意図的・計画的な準備や話合いを、教職員が一体となって行った。この過程があったからこそ、運動会は児童にとっても教職員にとっても、やらされるものではなく、自分たちでやるものとなった。

３　成果と課題

○　５つの“や”を大切にし、児童に委ねるところは委ねてきたことで、児童自身のやりたいと感じる気持ちが高まった。また、それを実行に移すプロセスも身に付いてきた。

○　児童を主役に置いた活動を計画することで、教職員の意識の変化が見られ始めた。

●　アンケートにおいて、満足度や自己肯定感を示す項目の数値が上がっていない。

●　学校生活に対する充足度が二極化しており、改善できていないため、特別活動と並行して授業改善を充実させる必要がある。

研究協議・指導助言

○　児童が主体的な活動にするためには、限られた条件の中で、児童に委ねることが可能な活動について前もって教職員で検討しておくことが大切である。

○　今回紹介した取組について、他校の児童や環境など、実態に合わせて実施可能な活動を取り入れることで、児童にとって、よりよい学校になっていくことにつながる。

分科会Ⅱ
小学校　児童会・クラブ・学校行事

だれもが生き生きと活躍できる集団の育成

～児童に委ねる活動を通して～

高知県安芸市立土居小学校
教諭　丸子　清志

提案要旨

１　はじめに

前任校の川北小学校では、令和元年度から３年間「夢・志を育む学級運営のための実践研究事業」の指定を受け、特別活動を中心とした研究を進めてきた。その結果、児童の主体性を育むことができた。一方、学校生活に対する満足度では二極化が見られるなど、２年間の取組における課題も明らかになった。その要因としては、学級や学年、委員会によって活動の内容や充実度が異なったり、すべての児童が活躍できるような活動が実施できなかったりしたことなどが考えられる。そこで、前年以上に特別活動の充実を図るとともに、すべての児童が活躍できるような実践を重ねていきたいと考え、本主題を設定した。

２　実践事例

(1)　委員会・異年齢交流の活性化

ア　児童を中心とした枠組みづくり

児童会活動では、児童主体の活動になるような枠組み作りに取り組んだ。児童たちの心の交流や思いやりの心の醸成を目指して、児童が企画した集会や異学年が交流する活動を実施した。

イ　校内掲示物の充実

児童の活動に対して、掲示物を利用した肯定的な価値付けを行い、児童のやる気や達成感につなげている。

(ｱ)　ありがとうメッセージ

委員会が企画した活動や行事の後には、必ず児童全員が、ありがとうメッセージを付箋に書き、感想や感謝の言葉を掲示物にしている。

(ｲ)　５つの“や”掲示物

「やりたい」、「どうやる」、「やってみよう」、「やってみたら○○だった」、「次はこうやりたい」という５つの“や”を用いた掲示物を作ることで、子どもたちが取り組んだ活動の足跡を大切にしている。

(2)　学校行事の充実について

ア　児童主体での運動会

代表委員会で運動会のスローガンを決定した後、各学年の代表児童から運動会を盛り上げるための工夫について意見が出された。それらの意見を基に、学年の枠を超えた３つのチームが立ち上がった。それぞれのチームが自分たちで考えた活動を各学年の児童と協力して行うことで、運動会を盛り上げた。

イ　教職員の意図的・計画的な準備

子どもたちの「やりたい」を実現するために、意図的・計画的な準備や話合いを、教職員が一体となって行った。この過程があったからこそ、運動会は児童にとっても教職員にとっても、やらされるものではなく、自分たちでやるものとなった。

３　成果と課題

○　５つの“や”を大切にし、児童に委ねるところは委ねてきたことで、児童自身のやりたいと感じる気持ちが高まった。また、それを実行に移すプロセスも身に付いてきた。

○　児童を主役に置いた活動を計画することで、教職員の意識の変化が見られ始めた。

●　アンケートにおいて、満足度や自己肯定感を示す項目の数値が上がっていない。

●　学校生活に対する充足度が二極化しており、改善できていないため、特別活動と並行して授業改善を充実させる必要がある。

研究協議・指導助言

○　児童が主体的な活動にするためには、限られた条件の中で、児童に委ねることが可能な活動について前もって教職員で検討しておくことが大切である。

○　今回紹介した取組について、他校の児童や環境など、実態に合わせて実施可能な活動を取り入れることで、児童にとって、よりよい学校になっていくことにつながる。

分科会Ⅱ　中学校　学級活動(3)

愛校心や郷土愛を高める活動を通して、自己有用感を育てる特別活動

～つながりを大切にしながら、キャリア教育の４つの視点を意識させ、自己有用感を育てる～

松山市立鴨川中学校
教諭　髙須賀　仁

提案要旨

1　はじめに

本校では、学校教育目標である「頼れる鴨中生は地域の誇り」を達成するために、キャリア教育の視点を意識した教育活動を推進している。これまで伝統や文化を大切に継承するとともに、学校全体の「つながり」を意識した上で、新たなチャレンジを重ねてきた。全教職員がすべての教育活動を通して生徒の自己有用感を高めようと意識統一することとともに、キャリア教育の４つの基礎的汎用的能力のどの能力を育成したいのかを常に明確にしながら、生徒の自己有用感の向上につなげていくことが大切であると考え、活動の充実を図っている。

2　実践事例

(1)　鴨川中学校特別活動部の取組

ア　ゆるキャラ「かもも」の活用

愛校心をもってもらいたいという目的で作られた。今では様々な媒体にも「かもも」が掲載され、鴨中生にとって欠かせない存在になっている。

イ　小中３校による子ども会議

中１ギャップの課題克服すること・小中が連携して地域をより良くしていくことという目的で始まった。定期的に報告会を行うことで、より前向きな実践につながっている。

ウ　クリーン鴨川

地域とのつながりをより強めることを目的とし、まちづくり協議会の方々と清掃活動を行う活動を取り入れた。自分の住んでいる地域で地域の方々と共に地域に貢献できることに対して、生徒は非常に充実感を得ている。

エ　ブロック活動の導入

異学年集団のつながりを強くし、学校全体で熱く取り組むことのできる行事をつくり、リーダー育成を図るという目的でブロック活動が導入された。現在５年目であるが、生徒が主体的に活躍できる行事として成熟している。

オ　キャリア・パスポートの工夫

キャリア・パスポートを本校での実態を踏まえ、使いやすいように見直した。キャリア教育の視点を意識し、身に付けさせたい力を明確にすることで、キャリア教育の指導を進めるとともに、自己有用感の高い生徒の育成を意識するようになった。

(2)　キャリア教育の視点を生かした授業について

ア　１年生の取組

キャリア教育の「自己理解・自己管理能力」を高め、友達との関わりを増やし、受容されることの喜び、友達の良いところを見つけ合うことの大切さを学ぶ機会とした。思考ツール「ジョハリの窓」を使い、自分自身を再発見し、他者との関わり方を見直すことができた。

イ　２年生の取組

「キャリアプランニング能力」を身に付ける機会として、人は何のために働くのだろうという学習課題のもと、思考ツール「ダイヤモンドランキング」を使って学習した。生徒たちは自分の夢を大切にしながら、人や社会に対して貢献し、経済的に生活・家族を支えることをしっかりと考えることができた。

3　成果と課題

○　キャリア教育の視点を教職員が意識することで、目の前の生徒を指導する際にも、生徒が将来幸せな人生を歩むことができるためにどう支援すればよいかを考えるようになった。

○　ブロック活動を通して、学校全体　が一つにまとまるようになり、生徒の自己有用感の育成につながっている。生徒自身のやってみようとする力を大切にし、周りの人と協働して、最後まで忍耐強くやり抜く生徒の育成をしていきたい。

研究協議・指導助言

○　様々な学校行事にブロック活動を取り入れることで、学校全体が団結して教育活動を行っているように感じる。

○　学校の教育目標を見据えた実践であり、活動意義とその効果を明確にすることで全教職員が取り組みやすい環境を構築している。今後も継続してほしい。

分科会Ⅱ　中学校　生徒会活動

主体的に考え実行する力を育てる生徒会活動

～城南プライドを「つなぐ」～

宇和島市立城南中学校
教諭　松崎　太一

提案要旨

１　はじめに

本校では、「自立と共生の力を持つ生徒の育成」の教育目標の下、他校との「横のつながり」や、次の学年へ継承していく「縦のつながり」、「教員同士のつながり」、そして「地域や県外とのつながり」を意識して活動に取り組んでいる。また、本校の生徒会目標「光り輝け城南プライド」の下、生徒が様々な活動を通して、「主体的に考え実行する力」を育てていきたいと考えている。

２　実践事例

(1)　コロナ対策を踏まえた行事の運営

例年、本校の文化祭は体育館で実施しているが、感染予防ガイドラインに従うと、無観客で行うしかなかった。そこで、教職員でプロジェクトチームを結成し、文化祭が実施できるように話合いを行った。その結果、地元にある文化会館を貸し切り、規模を拡大する形で行事を運営した。

(2)　学校の枠を越えたつながり

地元の堀端町にある中央公民館の青少年市民協働センター事業「ホリバタ」と連携し、市内３校の生徒会役員が集まり、中学校卒業後も学校の枠を越えて、活動することを目的とした「ホリバタ高等部」を結成した。学校の枠を越えた「つながり」ができた瞬間であった。

(3)　ボランティア活動の充実

毎週金曜日の朝にボランティア活動をする「朝ティア」を開始した。校内のボランティアだけでなく、近所の公園や小学校にも出向いて活動した。また、市内の学校３校が集まり、「つながり」を大切にした地域清掃活動にも取り組んだ。

(4)　被災地交流の活性化

福島県南相馬市の小中学生マーチングバンド「Seeds+」を地元の文化会館へ招待し、「きずなコンサート」を実施した。この団体は、愛媛県とのつながりも強く、西日本豪雨災害の時には、募金活動などの支援も行っていただいた。本コンサートを通して、福島県とも更に強いつながりができた。

３　成果と課題

○　生徒が考えた案を積極的に実行したことで、生徒は達成感や自己有用感を感じ、意欲向上につながった。

○　教員でプロジェクトチームを結成したことで、生徒のアイデアを基に教員が知恵を出し合い、様々なことが実現できた。

○　学校内外での様々なつながりを通して、集団の中で個が成長し、その成長が集団への成長につながった。

○　「主体的に考え実行する力が身に付いたと思うか」という質問に、生徒会役員全員が「付いた」と回答した。今後は、全校生徒が成長を実感できるようにしていきたい。

○　持続可能な生徒会活動にしていくために、校内の連携・協力体制を見直すとともに、より多くの生徒が主体的に関われる生徒会組織の運営を行いたい。

研究協議・指導助言

○　「ホリバタ高等部」を結成するために、他の中学校や愛媛大学に呼び掛け、市や県を巻き込んで運営しているところが良かった。

○　ボランティア通帳を活用し、通信簿にも記載するなど、ボランティア活動が活性化するような工夫がされている。

○　行事を地元の施設で実施する費用は、保護者や地域の方々と協力し、ＰＴＡ会費を活用している。